

2. 取組を進めるに当たり困難であった事例について

C. 教員の教育・研究指導能力の向上のための方策

④その他

《人社系》

●一橋大学社会学研究科総合社会科学専攻、地球社会研究専攻

「キャリアデザインの間としての大学院」の事例

(具体的に何を実施し、何が困難であったのか)

プログラムの実施運営は、キャリアデザイン推進室委員会が中心になって行った。推進室委員会に属する教員や高度職業人養成科目を担当する教員、キャリア支援者の特任講師はプログラムの実施運営に積極的かつ熱心に参加し、これらの教員や事務職員の努力でプログラムが支えられた。しかしそれ以外の教員の間では温度差があり、プログラムの認知度や講習会への参加の点で教員の間での差や偏りがあった。FDを実施してこのような問題に対処しようとしたが、温度差の解消には至らなかった。

(苦労したこと、困難であったことの具体的な要因は何だったのか、それにより実施内容がどのような影響を受けていたのか)

教員は授業等の教育や研究、会議等の業務で多忙であり、特にプログラムの担当者として指名されなければ、プログラムへの関与、参加は時間的にも大変である。特に大学院は大学院重点化以降院生数が増加したことで教員の負担が重くなった。

(どのように対応し、どのような結果が得られたのか、また、その結果が望ましいものではなかった場合、あらかじめどのように対応していれば適切であったのか、どうすればより良い結果を導くことができたのか)

何度かFDを実施して、教員の間での理解を広める努力をした。

2. 取組を進めるに当たり困難であった事例について

E. 学習・研究環境の改善

⑤その他

《人社系》

●一橋大学社会学研究科総合社会科学専攻、地球社会研究専攻

「キャリアデザインの間としての大学院」の事例

(具体的に何を実施し、何が困難であったのか)

本プログラムにより、院生の研究企画に対する研究資金の助成、RAの採用を行い、これらは院生の研究を促進すると共に、院生に対する経済的支援として有益であった。プログラムのその他の授業やキャリア支援でも、院生は学習・研究環境の改善という面で恩恵を受けた。しかし企画実践力強化部門の助成に申請できない、申請しても不採択となった者もあり、高度職業人養成科目を受講しなかった院生もかなりいる。その中には授業料を払うだけの経済的余裕がなく、休学しているために、科目の履修等ができないという院生も含まれている。企画実践力強化部門の研究助成で海外のフィールドワークに20万円の助成を受けても、50万円以上の授業料を払えば、休学しているよりも出費は多くなってしまう。院生が早く修了できるようにすると共に、研究支援と並んで、生活支援が必要となる場合がある。

(苦労したこと、困難であったことの具体的な要因は何だったのか、それにより実施内容がどのような影響を受けていたのか)

院生の就職状況がよくないため、修業年限を超えて滞留する院生が増加することになる。本プログラムでは、このような状況に対して、院生に必要な研究能力や就職の際に有効なスキルを強化することで、院生が標準の修業年限内で就職できるように意図したのである。しかし研究能力やスキルを高め、キャリア支援を行うだけで全て解決できるわけではない。

(どのように対応し、どのような結果が得られたのか、また、その結果が望ましいものではなかった場合、あらかじめどのように対応していれば適切であったのか、どうすればより良い結果を導くことができたのか)

本事業だけでは解決できない問題であり、他の方策と組合せ、連携することで解決の道を模索するしかない。